

CHOSHI (第16話)

(昭和35年)

高校2年の夏の大会が終わり、新チームがスタートした。藤本の肩は満足にはあがらなかったが、『もう一度野球をしたい』という気持ちが強くなり、チームに戻った。秋の大会、藤本はベンチに入ったが、試合に出ることは無かった。グラウンドには銚子一中、銚子四中、飯岡中で活躍した猛者達がおり、藤本の出番は無いと思われた。

県大会の1回戦、相手は木更津一高。試合は予想外の展開になった。岡本が打ち込まれ、守備にはミスが相次いだ。『このままでは負ける。これでは、甲子園は夢のまた夢だ。』チーム内に焦りが出てきた。そして、中盤にピンチを迎えた時、チームの視線はベンチにいる藤本に向けられた。

監督が藤本に声をかけた。『藤本、投げられるか?』藤本は『はい。』と答えて登板した。

約4ヵ月ぶりのマウンドだった。『この場所に戻ってきた。』野球をやっている者にとって、マウンドから見える景色は特別だ。野球は、ピッチャーの出来が勝敗に大きく左右するスポーツ。大きな責任を託させるゆえに孤独なポジションでもあった。

マウンドにあがった藤本だが、肩の不安は消えていなかった。『覚悟を決めるしかない。』そう思っていると、ショートの間根が近寄って来た。『藤本、俺はお前と甲子園に行く決めてんだ。俺の所に打たせろ。必ずアウトにしてやる。』さらに、横を見るとセカンドの芝野の声が聞こえた。『藤本、お前が銚子のエースだ。後ろは守ってやる。心配するな。』

藤本は覚悟を決めた。『肩はあがらない。でも、7分力なら投げることが出来る。守備を信じて打たせるしかない。』藤本が低めにボールを投げると、バッターは強い打球をショートに打った。そして、ショートの間根がこの打球を捕って、ダブルプレーになり、ピンチをしのいだ。

次の回の攻撃から、銚子商業打線は打ちまくった。藤本が登板し、銚子商業は全く違うチームになった。エースが登板すると、雰囲気ガラッと変わる。野球は不思議なスポーツだ。

この試合、銚子商業は逆転勝ちを収め、ここから銚子商業の快進撃が始まった。藤本は肩の不安をかかえながら全ての試合を投げた。チームは勝ち進み、決勝の千葉経済戦は10-0の圧勝だった。

藤本の抜群のコントロールで打たせてとるピッチングと、鍛えられた守備、そしてお互いがライバルで、その中から生まれたチームワークで銚子商業の野球部は一つにまとまった。銚子商業はここから関東の強豪校の一角になっていく。